

再び、倉沢がミッション・スクールを訪ねたのは木曜日の放課後である。

正門から坂道をあがる。

女学生たちの華やいだ声や熱っぽい視線から逃げるように倉沢は目を周囲の景色に転じる。色

づきははじめた^{いちよう}銀杏や^{けやき}欒の梢ごしに、ピアス館の

白い壁面が見える。^{しょうしゃ}瀟洒な洋館を眺めながら坂を登っていると、どこからか鐘を幾重にも打ち鳴らす音が大气のトレモロのようにかれの耳に響いてきた。

音楽準備室の板壁に雅子は倉沢が持ちこんだ壁紙の写真を飾って、作家をふりかえった。

「あっ、ちょっとそのまま」

椅子に座ろうとした雅子を制し、倉沢は写真の側に彼女が立つように頼んだ。

「何か」

「うむ……」

倉沢は腕を組みナターシャとつぶやいた。

「ナターシャ」は、祥宗寺で見つかった壁絵の女性の名前である。毎日、壁絵の女性を見つめて暮らしていたかれは、彼女をそのように呼ぶようになっていた。

「似ている」

作家は雅子と写真を見比べて思うのだった。

「ほんとに、お借りしていてよろしいのでしょうか」

雅子がきいた。

「ええ、若いあなただと、ナターシャは何か語りかけてくれるかも知れない。それを期待してのことです」

作家は真面目な口調でいった。

それから二人はしばらくナターシャを見ていた。

会話が途切れ、坂道で聴いた鐘の音が大きくなった。たくさんの鐘を打ち鳴らして、何か演奏しているのだ。讚美歌らしい。

「ご覧になりますか？」

作家の心中を察して、雅子が誘った。

「ええ、実はさっきからずっと気になってました」



挿絵 (M. Tasaka)

倉沢は鐘の音のことを口にした。

踊り場の壁面にステンドグラスをはめこんだ階段をあがって、二階の音楽ホールの一つへ倉沢は案内された。

かれは女子生徒たちがハンドベルを演奏する様子を見た。赤いクロスの上にならずらっと並んだ大小のハンドベルを、白い手袋をした女子生徒たちが巧みに打ち鳴らしている。まろやかで奥深い音色が耳に心地よい。この女学校ではハンドベル演奏は創立以来の伝統があるという。



挿絵 (A. Murayama)

準備室に戻ると、コーヒーを淹れながら雅子がいった。

「わたし、あれから曾祖母のことが学校の古い記録に書かれていないか調べてみました」

「ああ、それはよかった。あの当時、英語の女性教師は一人だけですから、すぐにおわかりになったでしょ」

倉沢がいい雅子はうなずいた。

かれも二年前、「ミッション・スクールの女学生たちが祥宗寺を訪れ慰問演奏会を催した」という海南新報の記事を見つけ、その裏付けを取るためミッション・スクールの明治時代の記録を読んだことがあった。

「わたしの曾祖母だという人は、武田ゆいですね」

「そう、武田ゆいです。学園史に名前が出ています」

「ええ。でもわたしはピアス館の音楽関係の古い資料で見つけました」

作家は顔をあげた。

「その資料、ここにありますか」

「はい」

「よかったら、すぐ見たいのだが」

作家は腰を浮かせた。

書棚から 雅子を取り出した古びた本の頁を作家はめくった。

指を止め、かれは本に目を落とした。

「やはり、そうか」

かれは満足気に呟いていた。